

広濟寺と近松門左衛門

く久々知妙見宮の由緒をふまえてく

広濟寺について

名称 久々知山 廣濟寺

宗旨 日蓮宗

総本山 身延山久遠寺（山梨県南巨摩郡身延町）

御本尊 一塔兩尊四師

御本仏 久遠実成本師釈迦牟尼仏

正行 南無妙法蓮華經

法縁 蕙師法縁

旧本山 京都市 本満寺

住職 石伏 龍齋 廣濟寺第二十一世・日蓮宗大荒行道五行成満・元日蓮宗大荒行道権伝師

一塔兩尊四師 南無妙法蓮華經を書写した多宝塔を真中に、左側に釈迦如来（説法印）、右側に多宝如来、周囲に四菩薩（上行・無辺行・浄行・安立行）、更に四天王を勧請して日蓮大聖人の大曼荼羅を木像化した御本尊。

法縁

中世に檀林という僧侶の教育機関が全国に有った、その仏教学研究の学系を法縁という。現在では教学が立正大学（東京都品川区）に統一がはかられたので、学系というよりも僧侶の子弟関係の系統の意味が強い。当山は江戸時代初期 身延山第二十九世 隆源院日筵上人を開祖とする法縁に属する。

目次

一 広濟寺について

二 目次

三 山門内外案内

四 本堂

五 鬼子母神

六 妙見堂

七 矢文石

八 近松門左衛門の墓

九 近松記念館

一〇 妙福堂

一一 山門（如意珠院）

縁起

一 「久々知の妙見宮としての広濟寺」

二 久々知

三 広濟寺の歴史

四 妙見大菩薩とは

五 妙見堂

六 矢文石

七 妙見宮が賑やかだった面影

八 撰津名所図絵

九 灯籠群

一〇 鳥居

一一 みくじ札

一二 広濟寺と妙見宮の衰微

一三 広濟寺の再復興

縁起

二 「近松門左衛門の寺院としての広濟寺」

三 広濟寺と近松門左衛門

四 近松門左衛門の墓

五 近松記念館

六 近松門左衛門について

七 出生

八 時代背景

九 歌舞伎の初期

一〇 女歌舞伎

一一 歌舞伎の成立

一二 浄瑠璃の成立

一三 近松門左衛門と法華経

一四 法華経との出会い

一五 法華に関する著作

一六 心中と念仏

付録

一 近松門左衛門作品名

二 浄瑠璃編

三 歌舞伎編

四 近松門左衛門年表

五 広濟寺寺宝等一覽

六 広濟寺歴代上人

七 参考文献

八

九

一〇

一一

一二

一三

一四

一七

一八

二〇

二一

二二

山門内外案内

本堂

六間四面、昭和六十二年五月十日に現在の新本堂が落成した。本堂建立に際し、地鎮祭には横綱「千代の富士関」に地固めの四股をお願いした。

御本尊は一塔兩尊四師。釈迦牟尼仏は説法印。多宝如来は合掌印。

日蓮宗の御本尊である十界互具の大曼荼羅を木像化した御本尊で、中央に三宝尊（宝塔、釈迦牟尼仏座像、多宝如来座像）、四菩薩（上行・無邊行・淨行・安立行菩薩立像）、日蓮大聖人座像、四天王を勧請。正面右側に鬼子母神・十羅刹女を勧請。

鬼子母神

広済寺本堂には京都本山立本寺第二十世靈鷲院日審上人（一五九〇—一六六六）開眼の鬼子母神尊像と十羅刹女像が勧請されている。尊像裏に壺形の花押がある。

日審上人は壺日審の名で親しまれた。九州・北陸等地方を布教し廃寺を興し説法七〇〇〇余座、立本寺貫首となつた日蓮宗有数の説教師。現実に即した説教、激しい折伏よりも、寛容な摂受で布教した。しかし、御題目に對しては瞬時の不信も許さない厳格さを持つていた。

摂津名所図絵を觀れば広済寺にも以前は鬼子母神堂が旧妙見宮東側に有つたと思われる。

鬼子母神とは、お釈迦様在世の当時、村がひっそりするまで他人の子供を食べてしまつた鬼神である。その鬼

子母神が、お釈迦様に諭されて、懺悔の念から法華經第二十六陀羅尼品で法華經の行者を守護する事を誓つて善神となつた神様。広済寺の縁日は毎月八日。

妙見堂

（本堂に向かい右手前にあるお堂）

平安時代中期の清和源氏の武將「多田満仲（源満仲）」を勧請と伝わる妙見大菩薩、脇師に牛頭天王・諏訪大明神を奉つてゐる。詳細は五頁参照。

矢文石

（須佐男神社境内）

多田満仲がこの地に妙見様を勧請するきっかけと成つた石で、多田満仲の矢文が当たつたと伝わる。詳細は六頁参照。

近松門左衛門の墓

（本堂の東側）

近松門左衛門の墓は、当山以外にも大阪の寺町に現存し、また京都本圀寺にもあつたそうである。しかし、当山の墓が本墓である事が定説に成りつつある。詳細は九頁参照。

近松記念館

（広済寺東隣）

近松門左衛門・広済寺の宝物の展示、各種の公演が可能なホール等を備えている。詳細は九頁参照。

妙福堂

妙福稲荷大明神を勧請。元は久々知村中に有ったが、当山十八世矢野上人代に道路建設のため当山に移動され勧請された。縁日は「二の午」の日。

山門

山門に掲げられている「如意珠院」の額は、後西天皇皇女檀宮様から開山如意珠院日昌上人が賜った額。当時開山日昌上人は宮様の御所への出入りを許されていた。ある時、檀宮様の御祈願が日昌上人の祈禱により叶った事から、この額を広済寺に賜った。このことから、開山如意珠院日昌上人の高徳ぶりが知れる。

縁起 一 「久々知の妙見宮としての広濟寺」

久々知

広濟寺は兵庫県尼崎市久々知に位置する。久々知は当時の摂津国に属し、姓氏録にある猪名の裔(すえ)、久々知の公が領した地で、太平記にある赤松円心が六波羅勢を追い払って皆を築いたのがこの地であると伝えられる。古文書には「久々知」とも「久々智」とも記されている。

広濟寺の歴史

広濟寺は元々禅宗の古刹であつたが、元弘三年赤松圓心と六波羅勢が対陣し兵戦の被害を受けてからは、荒れるがままに放置されていた。

開山如意珠院日昌上人は大阪の寺島(現在の松島)に有つた船問屋、「尼崎屋吉右衛門」の次男として生まれたと伝えられる。「正運院日遠上人」を師とし修行を重ねられた。

正徳四年(一七一四)二月二十五日、日昌上人はたま「これ仏縁の里、必定法華繁盛のところ」と久々知妙見尊の示現をこうむり、この地に廣濟群生の精舎建立の地と決定された。日昌上人の熱心な勸化により、建立事業は着々と進化した。この時の発起人の中には、大檀那としては当時の久々知の領主武蔵国忍藩ところ代官「生野郡太夫盈次(たねつぐ)」、また一段と大きな存在として近松門左衛門の作品出版を引き受けていた「正本屋九右衛門(山本治重)」、歌舞伎役者「嵐三右衛

門」、佐野川万菊」、藤川正松」等の名があげられる。

同時に、工事・計画等すべてこれらの人々が中心となつていた。また、尼崎藩主松平家の協力も得ていたと伝わる。しかし、広濟寺開山に至るまでには何といつても近松門左衛門の篤信が寄与する所が大きかつた。かくして、開山如意珠院日昌上人は由緒有る多田(源)満仲勸請の妙見宮を祭り、妙見本殿・本堂庫裡などを建立し法華道場として再興されたのが現在の広濟寺である。

(正徳四年(一七一四)九月二十五日官許を得る)

妙見大菩薩

妙見様は、尊星王・北辰菩薩・北辰尊星妙見菩薩・北辰妙見大菩薩とも呼ばれる。文字からも判る様に、北辰星つまり北辰星を人格化したものである。満天の星が北辰星を中心にくのを觀て古代人は、北辰星が全ての星の王と考えた。北斗七星も北辰星を捜す目安となるため北辰星と組んで信仰の対象となつた。中国の道教と関わりがあり、北辰星は太陽や月までも統率し、天候等自然界を意のままに動かす極めて位の高い神様とされた。その他 人間の善悪功罪を調べて、寿命や貧富を司る。中国の清朝以前は官吏登用試験の守神として北斗第一星を崇められた。仏教においても「七仏八菩薩所説陀羅尼經」に、「国土を守るために国王をたすけ災難をなくし、敵対するものを退けるために様々な不思議な力を以て守つて下さるので妙見」と説かれていた。そこからか、領主や武將が妙見宮を勸請する者が多く、多田源氏もその範疇だつたと想像できる。また、「人々の福を増

し、寿命を延ばす」とも説かれている。妙見という名から眼病に靈驗ありと、鳥羽法皇が眼病の祈禱をされた事もある。

妙見堂

多田源氏の頭領「源満仲（多田満仲）」勸請の北辰妙見大菩薩（妙見さん）を勸請。

妙見大菩薩の御神体左に「牛頭天王」、右に「諏訪大明神」を勸請。他にも、古くから伝わる様々な諸天善神・先師を勸請している。江戸時代は広済寺の妙見大菩薩、諏訪大明神、牛頭天王は久々知村の氏神様であった。

（角川文庫 地名辞典「兵庫県」より）。縁日は一月十六日・八月十六日。

現在のお堂は、明治時代の廃仏毀釈（きしやく）による打撃を被り、妙見宮本殿（現在の須佐男神社）を失うまでは開山日昌上人を奉る開山堂であった。廃仏毀釈までお堂の中心に有った開山日昌上人座像は妙見菩薩右側に安置してある。

矢文石

現在の須佐男神社境内に在る。「摂津名所図絵」によると天徳元年（西暦九五七）当時の一帯を支配していた豪族、多田源氏の頭領「多田満仲」が、多田神社（現在の川西市多田院）から矢文を放つや、この矢文石に当たり日本最初の北辰星（北辰妙見大菩薩）をこの地に祭つたとされ、現在でも名残りの「矢文石」が広済寺隣の須佐男神社境内にのこっている。

多田満仲（九一二～九九七）平安時代中期の武将。清和天皇第六皇子貞純親王の長男で鎮守府將軍源経基の嫡男。延喜十二年四月十日鎌倉に生まれる。武勇に優れ、長じて現在の川西市多田院に新田城を築き、村上、冷泉、圓融、花山の天皇に仕えた。源氏十四流の中で摂津源氏または多田源氏の頭領として名をはせた。武将であるため戦による殺生はなはだしく、出家した息子の勧めもあり、仏教を信心するようになる。髪を剃り満慶と改名し多田院（現在の多田神社）廃仏毀釈のため神社となる）を創建した。

廃仏毀釈 明治維新直後より明治八年に行われた時の政府の仏教排斥運動。平田派国学者の影響が強かった維新政府は、神道国教化政策により江戸時代の幕藩体制に組み込まれた仏教（寺請け制度）に打撃を与え、天皇の政治的支配地位を神道に結びつけて確立しようとした。神仏判然令により寺院で神様を祭れなくなったり、仏像や經典が破棄され焼却されたり、寺院が廃止統合されたり、神社建立の為に寺院の境内を撰取されたりした。明治八年十一月に信教自由の保護が各宗に通達されるまでこの狂風は続いた。広済寺もこの時代に開山日昌上人以来の妙見宮本殿・境内地の大半・寺宝を失った。

妙見宮が賑やかだった面影

先にも述べた通り、広済寺妙見宮は大阪の商家や庶民

の信仰を集め、参拝客で大変賑わった。いくつかの例を示す事にする。

撰津名所図絵

広濟寺は江戸時代の出版物「撰津名所図絵」に久々知妙見堂と記載されている。挿絵の上の部分に、「近年特に参る人が多くこれを時行（はやり）神といふ」とあるから、図絵が出版された寛政頃は能勢妙見と並ぶ世に聞こえた寺であつたと記録されている。

鳥居

広濟寺西側の門（本堂に向かって左側）の石の鳥居は旧国鉄神崎駅（現JR尼崎駅）駅前には有つた物である。当時は駅から広濟寺まで一本道の参道があつたそうである。この鳥居はキリンビール尼崎工場進出の折り、解体移動され現在に至る。また、昔は神崎川右岸にも鳥居が在つた。1キロ以上離れた駅や河川沿いに鳥居が有つた事からも、当時の妙見宮の賑わいが容易に想像できる。

灯籠群

広濟寺境内・須佐男神社境内に沢山の灯籠があるが、妙見宮にまつわるものが多い。大阪の講中の物、古今の有名俳優の物、参道の灯籠の名残り等様々である。近世に於て能勢の妙見様と並び称され、撰津名所図絵にあるように「はやり神」として賑わつた一端が知れよう。

妙見みぐじ札

日昌上人（漢文）・近松門左衛門（和文）合作の「妙見みぐじ札」版木（現存）が広濟寺に伝わる。当時既に世に知れた近松門左衛門が「おみぐじ」を作る事からも当時の繁栄が偲ばれる。

広濟寺と妙見宮の衰微

残念ながら、江戸時代には大変賑わつた久々知の妙見宮であるが、明治時代の廃仏毀釈の狂風は当山にも及び、境内地の大半を失い、寺勢は急激に失墜した。妙見宮伽藍は須佐男神社となり御神体は当時の開山堂たる現在の妙見堂に勧請してある。

また、第二次世界大戦終了後の混沌とした時代には、当時としても貧乏寺に成り下がり、檀家数も十軒余りの住職のなり手さえ無い時代が続いた。

広濟寺の復興

現住職の時代になつてからは、住職檀信徒の精進のもと、高度成長・尼崎の人口増加にも助けられ、檀信徒数も数百軒に増え、本堂・庫裡の再建し、久々知の妙見宮・近松門左衛門の寺として恥じない程にまで復興した。更に、霊験あらたかな由緒有る妙見様の妙見堂を新規建立等の事業が残っております。広濟寺護持会に僅かでも浄財を賜れば幸いです。

縁起 二 「近松門左衛門の寺院としての広濟寺」

広濟寺と近松門左衛門

近松門左衛門が広濟寺と縁を生じたのは、開山日昌上人の父、尼崎屋吉右衛門が知人であった為である。

近松門左衛門は尼崎屋吉右衛門宅にたびたび逗留し、諸国の旅人達から様々な話を聞くとともに、そこを仕事部屋とした事もあった。

開山にあたり近松は御経十部を寄進するとともに、知己に対する誘引の文章を送っている。開山の正徳四年から二年後、享保元年九月の「広濟寺開山講中列名縁起」中に、先にあげた篤心者のほかに近松門左衛門の名前が見える。この時六十四才、京から大坂へ移って十年足らず、開山に協力してここを檀那寺とした。

この年没した母を広濟寺に葬り、その機会に家宝の二位大納言阿野実藤筆の法華経和歌集二巻、後西天皇直筆の色紙を寄付する等、縁を深めている。当時、広濟寺本堂裏には「近松部屋」という、六畳二間、奥座敷四畳半の建物が設けられていた。七十二才で世を去るまで、近松はここで傑作「心中宵庚申」等幾多の名作を著作したとも伝わる。今でも、近松愛用の遺品や近松部屋の階段などが広濟寺寺宝として近松記念館に展示されている。

近松臨終の地は尼崎屋、広濟寺等諸説があるが明確でない。しかし、遺骨は広濟寺に葬られ、妻の菩提寺大阪谷町法妙寺にも分骨されている。心中、身代り等劇的な死を多く著作した近松門左衛門もその臨終は大変安らかであった。

参考一 (近松門左衛門の寄附記録)

和尚法華經二十八卷、和歌二卷

二位大納言實藤卿墨痕

百二十代後西院勅筆

高松殿に在御の時御七歳の宸翰也

右從町尻宰相兼量卿賜之仍奉

寄附於久々知山廣濟寺者也

近松門左衛門信盛

釋尊涅槃之図

近松門左衛門男杉多門梅信筆

享保十二年丁未二月十五日

参考二 近松門左衛門辞世文

死期を悟った近松は画家となっていた息子に正装の肖像画を描かせたが、近松はその肖像画に生涯を振り返って悔いの無い事をユーモラスに書き下した。以下その文章。

近松門左衛門性者杉森字者信盛平安堂巢林子之像代々甲冑(かちちゆう)の家を生れながら武林を離れ三槐九卿(さんかいきゆう)につかへ咫尺(ししやく)し奉りて寸爵なく市井に漂て商買しらず陰に似て陰にあらず賢に似て賢ならずものしりに似て何もしらずよのまがひものからの大和の数ある道々 妓能 雑芸 滑稽の類まで知らぬ事なげに口にまかせ筆にはしらせ

一生囀（さえず）りちらし 今はの際にいふべく
おもふべき真の一大事は一字半言もなき倒惑こ
ころに心の恥をおほいて七十あまりの光陰 おも
へばおぼつかなき我世経畢（へおわんぬ）

もし辞世はと問人あらば

それぞ辞世

去ほどに扱（さて）もそのうちに

残る桜が花しにほはゞ

享保九年中冬上旬

入寂名 阿禱院穆矣日一具足居士

（あのくいんぼくいにちいちぐそくこじ）

不俟終焉期 予自記 春秋七十二歳

のこれとはおもふもおるかうづみ火のけぬ

まあだなるくち木がきして

近松門左衛門の墓

本堂の東側に位置。昭和四十一年九月二日国定史跡に指定される。近松門左衛門は享保九年（西暦一七二四）、七十二才で死去。広濟寺と大阪谷町法妙寺（現在は移転・墓のみ有る）に葬られた。広濟寺の墓石は緑泥片岩の自然石。高さ五十センチ、緑色で左上端が削られた様なこじんまりとした墓である。極近くにはモチの木が植わっている。尚、京都大本山本圀寺（当時は京都六条・現在山科に移転）にも墓があった。

戒名は「阿禱院穆矣日一具足居士」。これは生前に近松門左衛門が自分でつけた戒名と伝わる、辞世にも残されている。横の、女性の戒名「一珠院妙中日事信女」は

近松門左衛門の妻の戒名である。（享保元年九月九日寂。一説には母親の戒名ともあるが間違い）近年に至つても近松門左衛門作品の舞台や映画化の際は俳優が公演の成功を祈つて参拝に来る。

近松記念館（広濟寺東側）

近松門左衛門の偉業を讃え、広濟寺に伝わる殆ど未公開であつた遺品、寺宝を公開し、芸術文化の振興・継承の為に、建設された。昭和四十八年、大近松二百五十年祭の時に計画され、財団法人近松記念館が建設を進め昭和五十年三月着工、同年十一月二十二日完成。

近松遺品六十余点等の展示室、近松作品の上演・講演も行われる二百人収容のホールがある。ホール・会議室・和室広間等広く一般に解放し、文化教室等も開かれて
いる。
（電話〇六〇四九一〇七五五）

近松門左衛門について

近松門左衛門は七十二才で没するまでに、歌舞伎脚本三十余編、時代浄瑠璃八十編、世話浄瑠璃二十四編を著作し、日本最大の劇詩人とたたえられると同時に、イギリスの劇詩人シェイクスピアと対比され「東洋のシェイクスピア」とも称される江戸時代の文豪。近世演劇の浄瑠璃・歌舞伎作者。

浄瑠璃の竹本義太夫、歌舞伎の坂田藤十郎の名を高らしめたのも、近松の作品の力であつた。近松は初めは歌舞伎作者として歌舞伎戯曲の水準を高め、後により文学

的な浄瑠璃に移り、歌舞伎で学んだ現代性や手法を浄瑠璃に持ち込んで、中世的な浄瑠璃を一変して近代戯曲を確立した。それが近松の功績である。

出生

本名は「杉森信盛」。通称は平馬、別称は平安堂、巢林子、不移山人などと称した（広済寺墓前の柩には近松巢林子墓とある）。承応二年（西暦一六五三）、越前吉江の吉江藩三百石取の藩士杉森信義の次男に生まれ、幼名を次郎吉と称し、少なくとも十二才になる寛文四年（西暦一六六四）までは越前の地に住んでいた。

父「信義」は寛文七年に吉江藩を辞し、京都へ上り、近松自身は公家「一条禅閣惠観（ぜんこうえかん）」に仕えたが、近松二十才の時に一条惠観が死去したのを機に主家を辞している。

その後、作者になるまでの近松門左衛門の消息は明らかではない。一説によると、阿野実藤（さねふじ）、町尻兼量（まちがね・かねみち）正親町公通（おおぎまち・きんみち）などに仕え、俳諧を学んだといわれる。また、近江国の三井寺高観音の近松寺（ごんしょうじ）に遊学したことがあり、筆名の「近松門左衛門」もこれに因んだともされる。その他にも、一時は出家して後に還俗して作家の道に進んだという説もある。

いずれにしても、この間に和漢の古典を学び、仏教に関する教義などを習得した事は間違いないものと思われる。そして、延宝五年（西暦一六七七）頃、宇治加賀掾（かがのじょう）のもとで浄瑠璃作家となったというのが一般的な見方である。

一条禅閣惠観

後陽成（ようぜい）天皇（一五七一～一六一七）第九子。一家を継ぎ、寛永六年従一位に進み、摂政を二度歴任。慶安五年入道し「惠観」を名乗る。寛文十二年六十八歳で入寂するまでの二十一年間仏門にあった。

時代背景

歌舞伎の初期

江戸時代の芸能には、庶民の中に育ち庶民の中に支持された人形浄瑠璃と歌舞伎がある。室町時代以来の芸能として能があつたが、武家階級の式楽と化し庶民階級とは関係の無い存在となつてしまつていく。

現在も世界に比類なき独自性と芸術の花を咲かせる歌舞伎も、その発生期は常に幕府の弾圧の対象となつたのである。しかし、庶民の支持を盾に禁制と弾圧をくぐり抜けて、雑草の様に発展してきたのである。

そもそも、歌舞伎は慶長年間に出雲の芸人が京都の四条河原や北野天神境内を足場として発足する。その内容は、中世以来風流化した念仏踊を一変した歌舞伎踊であった。中世の能との決定的な違いは、「面」を捨てた事と、踊りも能の舞いではなく庶民の踊りを基としている。それまでの能に代表される日本の伝統は貴族や武家を中心に発展してきたのに対し、歌舞伎は庶民の中から生まれ、庶民の中に育つたのである。

女歌舞伎

初期の歌舞伎の特筆すべきことは、女性が主導権を取ったことである。それまでの伝統芸能はすべて男性俳優によるものであった。まして、女性は、人質や政略結婚、子供を生み育てる道具等としか考えられない封建時代、女性にとつては男性からかなり卑下された陰の時代の事である。

当時にあつて、女性の魅力を再認識させた出雲に始まる歌舞伎踊は、やがてブームとなり、沢山の歌舞伎の自主興行による職業的劇団を誕生させた。歌舞伎の女達は、異国渡来の十字架を胸からさげ、新渡来三味線をかきならし、男装して流行服で繰り出した。男達は我先にと、彼女たちの恋の歌や踊りにうつつをぬかしたそうである。

しかし、当時の時代に於ては容色本位の芸能や彼女達の生活・行動には目にあまるものも多く、寛永六年（一六二九）には、女性が一切舞台上に立つ事を禁止されてしまった。

歌舞伎の成立

歌舞伎の禁止令以降、若衆歌舞伎が台頭するが、これも容色本位であつてやがて禁止される。そこで、容色本位から芸術本位の歌舞伎へと向上していき、以後現在の歌舞伎へと発展する。女優の役柄は男性が代行する事から女形（おやま）が誕生した。発展に伴い、登場人物における役割の分業化専門化が始まる。

やがて、元禄時代芝居と遊里の二つは、元禄時代の庶民の夢を現実のものとする愉しみと慰めの場所となつた。

歌舞伎芝居はこの頃民衆の生活に根ざした文学美術と並んで著しく発展した。演技も向上し、脚本の製作もそれまでは俳優の兼業であつたものが、専門の狂言作家を生むようになった。上方の坂田藤十郎、女役の芳沢あやめ、江戸の市川團十郎は当時名優の代表格であり、専門の脚本作家として優れていたのが近松門左衛門である。当時の人気は左の役者の給料からも判るだろう。

役者の給料

坂田藤十郎	五〇〇両（元禄末年）
生島新五郎	二五〇〇両（元禄末年）
芳沢あやめ	一〇〇〇両（正徳二年）
二代目団十郎	一二〇〇両

人形浄瑠璃

人形使いの傀儡子（かいらいし）と浄瑠璃とが結びついて近世の始めに生まれた人形浄瑠璃では、竹本義太夫があらわれて、貞享二年（一六八五）大阪道頓堀に竹本座を創設、これも近松門左衛門の脚本を次々とえて人形芝居の最盛期を迎える。近松門左衛門も歌舞伎作者から浄瑠璃作者へと移行した。

近松門左衛門と法華經

近松門左衛門は日蓮宗の広濟寺開山に尽力された。又、広濟寺に埋葬されている。恐らく近松は法華經と日蓮上人の皈依者であつたのであろう。中世は現在から想像のつかない程に神仏が絶対視されていた。宗教から近松門左衛門を考察してみる事にする。

法華經との出会い

広濟寺開山への尽力・近松の父親が京都大本山本因寺（日蓮宗）に葬られていた事からも近松が日蓮宗である事は容易に想像できる。近松の家は父杉森信義の代に禅宗から日蓮宗に改宗したようである。（日蓮宗事典）近松は京都に移つてから一条禅閣恵観に仕えたが、主人の死後に古典や仏教等様々な研鑽を積んだ事は先に述べた。特に近松は京都日蓮宗大本山妙顕寺第十八世勝光院日耀上人の知遇を得て仏教の奥義を学んだ。日耀上人は当時の僧侶の教育機関（檀林）で教鞭をとり、京都本山本法寺、千葉本山法華經寺の貫首を歴任、水戸光圀の要請で水戸三昧堂檀林（現在の本山久昌寺）の学僧の教育にもあたつた高僧である。近松門左衛門の仏教知識は相当のものだつた事であらう。

法華に関する著作

仏教色の強い題名は数多く見受けられるが、ここでは次の数作につき言及する。

「日蓮聖人記」 享保三年大阪竹本座で「日蓮上人記」と題し、人形芝居の上演をした。正本が現存しないので内容は不詳である。日蓮聖人の伝説を本格的に脚色し舞台上上演した最初のもので、これが日蓮記のもととなつた。近松没後に「いろは日蓮記」、「日蓮記 兎硯（ちごすずり）」、「日蓮記 御法海（みのりうみ）」という題で改訂脚色され歌舞伎・浄瑠璃に上演された。更に、文化・文政（一八〇〇年頃）時代から幕末まで数多くの日蓮記が出ている。芝居の興行が思わしくないときは「日蓮記」か「忠臣蔵」をすれば損を取り戻せると言われるぐらい有名な出し物となつた。

「大覚大僧正御伝記」 元禄四年十一月上演とされる。後に、「女人即身成仏記」と改題。大覚大僧正は先に述べた日蓮上人の弟子。南北朝時代に活躍した日蓮宗僧侶。祈雨や戦勝祈願の法華經転読による祈願成功から日蓮宗として初めて朝廷と足利幕府に接近して加護をえた高僧。祈雨を始め数々の功績から日蓮上人に大菩薩号、日朗上人・日像上人に菩薩号、自らは大僧正を朝廷から賜つた。又、備前法華つまり現在の岡山県を熱心な法華信徒の地域にした。

「日親上人徳行記」 幾多の法難をものともせず京都・九州で活躍した戦国時代の名僧久遠成院日親上人の伝記を脚色した浄瑠璃本。年月日は不明であるが、柳亭種彦の「柳亭浄瑠璃本目録」に載り、種彦は実見の上、近松作と確認している。現在、その存否は不明である。日親上人は熱い鍋を頭にかぶせられる法難にあつた事から「なべかむり日親」として有名。

その他、「出世景清」の冒頭には「妙法蓮華經觀世音菩薩、普門品第廿五は大衆八軸の骨髓、信心の行者大慈大悲の光明あづかり奉る、觀音威力ぞありがたき。」と書かれている。「心中天の網鳥」の道行「名残りの橋づくし」には「一つ蓮の頼みには、一夏に一部、夏書せし、大慈大悲の普門品、妙法蓮華京橋を、越ゆればいたる彼の岸の玉の台に法を得て、仏の姿に身をなり橋、衆生済土がままならば云々」とある。

唯一の南無妙法蓮華經による心中の作品「心中重困筒」には「此の三界の衆生は、皆是れ我が子と聞くとときは、親諸共に至るなりけり、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經云々」と記されている。

心中物と念仏

心中物の心中シーンは「心中重井筒」の南無妙法蓮華經を除けば、南無阿彌陀仏で心中している。(註)これは何故だろう。法華の信徒たる近松門左衛門自身は南無妙法蓮華經を唱えていたはずである。

当時から阪神間は浄土真宗の勢力が強い地域であるが、当時としては、現世はさておき来世は極樂浄土に往生し永遠の幸福(成仏)を得ようとする未来成仏の思想が根強く支持されていた。男女の悲惨な心中の理由には阿彌陀仏の西方極樂浄土の思想が背景となっている。

これは、明らかに娑婆即寂光浄土の現世重視の法華思想と正反對の宗教的思想である。近松の時代に於ける謗法觀念は今よりも強いはずであるが、近松が題目でなく念仏を用いた理由を考察してみる。

近松の心中物は実話を基盤としている。阪神間は古来浄土真宗が強く、心中する人のほとんどは浄土宗系の門徒だと想像できる。

南無妙法蓮華經には現世を諦め極樂往生を願う思想が無いので、心中の宗教的動機が起こらない。法華では自殺すると無間地獄に落ちるとされている。

註 未確認であるが『心中万年草』は真言を唱えて心中するとの指摘を頂いた。

近松門左衛門作品

〔浄瑠璃〕

作品名

上演年月

花山院后諍

寛文十三年正月（延宝元年）

（近松二十一才）

源氏供養

延宝四年五月

滝口横笛

延宝四年十一月

舍利

延宝五年（説）

三社託宣

延宝六年

念仏往生記

延宝六年

牛若千人斬

延宝七年夏

あふひの上

延宝七年（説）

赤染衛門栄花物語

延宝八年一月

藍染川

延宝年中

東山殿子日遊

延宝九年一月（天和元年）

つれづれ草

延宝九年五月（天和元年）

鳥羽恋塚物語

天和元年前

惟喬惟仁位諍

天和元年前

十六夜物語

天和元年前

平安城

天和元年前

亀谷物語

天和三年

京わらんべ

天和三年

世継曾我

天和三年九月

甲子祭

天和四年（貞享元年）

賢いろは物語

貞享元年三月

凱陣八島

貞享二年

盛久

貞享三年

後修訂「主馬判官盛久」

源氏長久移徒祝

貞享三年正月

久移徒祝「わたましのよろこび

出世景清

貞享二年

三世相

貞享三年五月

佐々木先陣

貞享三年七月

「佐々木大鑑」と同一

千載集

貞享三年

薩摩守忠度

後改訂「薩摩守忠度」と改題

貞享三年初冬「千載集」の改訂

源三位頼政

不詳

頼朝浜出

貞享三年正月

大原御幸

不詳

今川了俊

貞享四年正月

（奥附三年冬？）

信濃源氏木曾物語

不詳

弁慶京土産

元禄初年（説）

本朝用文書

元禄初年（説）

花洛受法記

元禄二年三月

天智天皇

元禄二年三月

忠臣身替物語

元禄二年八月

自然居士

「今様柏木」と同一

鳥帽子折

元禄三年正月

十二段

元禄三年三月（説）

大覚僧正御伝記

元禄四年十一月（説）

後「女人即身成仏記」と改題

柏崎 元禄五年一月(説)
津戸三郎 元禄五年

都の富士 元禄六年正月
「門出八島」と同一

ひら仮名太平記 元禄六年三月

融大臣 元禄六年以前

弱法師 元禄九年一月(説)

佐藤忠信二十日正月 元禄九年四月

当麻中将姫 元禄九年

多田院開帳 元禄十四年頃(説)

賀古教信七墓廻 不詳

文武五人男 元禄十年七月

頼朝伊豆日記 元禄十一年六月

当流小栗判官 元禄十二年三月

最明寺殿百人女 元禄十二年

曾我五人兄弟 元禄十三年

百日曾我 元禄十四年九月

十二段長生嶋台 元禄十四年秋

天鼓 元禄十四・十五年説

信田小太郎 元禄十四年以降

日本西王母 加賀 正本「南大門彼岸」と
ほとんど同じ

曾根崎心中 元禄十六年五月

一心五戒魂 元禄十六年十一月

薩摩歌 宝永元年一月

雪女五枚羽子板 宝永元年1月(説)

甲賀三郎 宝永元年四月

用明天皇職人鑑 宝永二年十一月

松風村雨東大帯鑑 宝永二年十一月(翌三月)

鎌田兵衛名所盃 この頃

源義経将棊経 宝永三年一月

田村將軍初観音 宝永三年春

本領曾我 宝永三年三月

心中二枚絵草紙 宝永三年三月

兼好法師物見車 宝永三年五月

卯月の紅葉 宝永三年六月

曾我扇八景 宝永三年七月

堀川波鼓 宝永四年二月

五十年忌歌念仏 宝永四年春

卯月の潤色 宝永四年夏

酒呑童子枕言葉 宝永四年九月

心中重井筒 宝永四年冬頃

音曲百枚笹 宝永四年十月

狩劔本地 宝永四年十一月

傾城反魂香 宝永五年春

丹波与作待夜の小屋節 宝永五年

淀鯉出世滝徳 宝永五年冬頃

心中刃は氷の朔月 宝永六年六月

曾我虎ヶ磨 宝永七年一月

傾城吉岡染 宝永七年三月

源氏大掛物十幅一対 宝永七年四月

心中万年草 宝永七年五月

百合若大臣野守鏡 宝永七年八月

孕常盤 宝永七年八月

源氏冷泉節 宝永七年秋

平家女護島	本朝三国志	博多小女郎浪枕	曾我会稽山	日本振袖始	山崎与次兵衛寿の門松	聖徳太子絵伝記	鑑の権三重帷子	国性爺後日合戦	国性爺合戦	生玉心中	持統天皇歌軍法	大経師昔暦	嵯峨天皇甘露雨	娥かるた	相模入道千匹犬	天神記	积迦如来誕生会	静胎内さぐり	廻山姥	弘徽殿鶺鴒羽産家	傾城掛物揃	夕霧阿波鳴渡	大職冠	今宮の心中	冥土の飛脚	吉野都女楠	碁盤太平記
享保四年八月	享保四年二月	享保三年十一月	享保三年七月	享保三年二月	享保三年一月	享保二年十一月	享保二年八月	享保二年二月	正徳五年十一月	正徳五年五月	正徳五年春	正徳五年夏	正徳四年十月	正徳四年八月	正徳四年四月	正徳四年正月	正徳三年(説)	正徳三年閏五月	正徳二年九月	正徳二年五月	正徳二年三月	正徳二年春	正徳二年春	正徳元年夏	正徳元年三月	宝永七年	宝永七年

傾城島原蛙合戦	傾城酒呑童子	井筒葦平河内通	隻生隅田川	日本武尊吾妻鑑	心中天の網島	津国女夫池	信州川中島合戦	唐船嘶今国性爺	心中宵庚申	関八州繫馬	(以上)
享保四年十一月	享保四年(説)	享保五年三月	享保五年三月	享保五年十一月	享保五年十一月	享保六年二月	享保六年八月	享保七年一月	享保七年四月	享保九年一月	

〔歌舞伎狂言〕

作品名

上演年月

大名なぐさみ曾我	元禄十年
百夜小町	元禄十年
夕霧七年忌	元禄十年
今源氏六十帳	元禄八年
姫蔵大黒舞	元禄八年十一月
水木辰之助餞振舞	元禄八年九、十月
仏母摩耶山開帳	元禄六年
傾城阿波の鳴門	元禄八年
傾城江戸桜	元禄十一年
一心二河白道	元禄十一年
傾城仏の原	元禄十二年一月
敦賀の津三階蔵	元禄十二年七月
河弥陀が池新寺町	元禄十二年十月

福寿海	元禄十年十一月
けいせい弘誓船	元禄十三年二の替り
御曹司初寅詣	元禄十四年初興行
傾城富士見る里	元禄十四年二の替り
新小町栄花車	元禄十四年十一月
傾城壬生大念仏	元禄十五年二の替り
女郎来迎柱	元禄十五年三の替り
壬生秋の念仏	元禄十五年秋
傾城三つの車	元禄十六年二の替り
唐崎八景屏風	元禄十六年秋
吉祥天女安産玉	宝永元年十一月
春日仏師枕時鶏	宝永元年十一月以後
傾城金竜橋	宝永二年夏
日本振袖始	享保三年二月
津国女夫池	享保六年二月
傾城若紫	年代不詳

近松門左衛門年表

年号	西曆	年齢	出来事
承応二年	一六五三	一	近松門左衛門生誕
寛文十一年	一六七一	一九	山岡元隣編「宝蔵」に近松の句が載る。 「しら雲や はななき山の 恥しく」
延宝五年	一六七七	二五	この頃宇治加賀掾（かがのじょう）のもとで浄瑠璃作家となる
天和二年	一六八二	三〇	（文芸）井原西鶴「好色一代男」刊行される
天和三年	一六八三	三一	近松門左衛門「世継曾我」宇治座上演
貞享元年	一六八四	三二	竹本座旗揚げ興行に「世継曾我」改訂上演
貞享二年	一六八五	三三	近松門左衛門「出世景清」竹本座・山本座上演
貞享三年	一六八六	三四	近松門左衛門「佐々木大鑑」竹本座上演道行が好評で義太夫節流行
貞享四年	一六八七	三五	近松門左衛門「今川了俊」竹本座上演 浄瑠璃・狂言作品に署名し始める。四月二十二日父「信義」没（六十七才） 京都本圀寺（日蓮宗大本山）に葬る
元禄元年	一六八八	三六	（政治）幕府「生類憐愍令」を出す
元禄二年	一六八九	三七	（世界）イギリス「名譽革命」
元禄六年	一六九三	四一	（文芸）松尾芭蕉「奥の細道」の旅に出る 近松門左衛門「仏母摩耶山開帳」都座上演
元禄七年	一六九四	四二	（文芸）井原西鶴没（五十二才） （文芸）松尾芭蕉「奥の細道」刊行 同年芭蕉没（五十一才）
元禄八年	一六九五	四三	近松門左衛門「傾城阿波の鳴門」早雲座上演
元禄十一年	一六九八	四六	近松門左衛門「当流小栗判官」竹本座上演
元禄十三年	一七〇〇	四八	近松門左衛門「百日曾我」竹本座上演
元禄十五年	一七〇二	五〇	近松門左衛門「傾城壬生大念仏」都座上演 （事件）赤穂浪士打ち入り

元禄十六年	一七〇三	五一	近松門左衛門「曾根崎心中」大阪竹本座で上演 宇治座も改訂公演 この年、大阪の曾根崎新地開発される
宝永一年	一七〇四	五二	(文芸)初代「市川団十郎」没(四十五才)
宝永二年	一七〇五	五三	近松門左衛門「用明天皇職人鑑」竹本座上演
宝永三年	一七〇六	五四	この年初め、京より大坂に移る
宝永四年	一七〇七	五五	(事件)富士山噴火し山腹に宝永山を生ずる
宝永六年	一七〇九	五七	(政治)徳川綱吉没、幕府「生類憐愍令」廃止
宝永七年	一七一〇	五八	(文芸)坂田藤十郎没(六十三才)
正徳元年	一七一〇	五八	近松門左衛門「心中万年草」竹本座上演
正徳元年	一七一〇	五九	近松門左衛門「冥土の飛脚」竹本座上演
正徳四年	一七一四	六二	宇治座でも改訂上演 広濟寺開山、九月二十四日改宗の官許を得る。 十月広濟寺妙見宮開帳
享保元年	一七一六	六四	秋、近畿諸国大飢饉 弟「岡本一抱」没
享保三年	一七一八	六六	九月九日、母没。戒名「智法院貞松日記」広濟寺で法要。
享保五年	一七二〇	六八	近松門左衛門「博多小女郎浪枕」竹本座上演
享保六年	一七二一	六九	近松門左衛門「心中天の網島」上演
享保七年	一七二二	七〇	近松門左衛門「信州川中島合戦」竹本座上演
享保八年	一七二三	七一	近松門左衛門「心中宵庚申」竹本座上演
享保九年	一七二四	七二	知人に体の衰えを訴える書状を書く (文芸)心中事件の出版・上演が禁止される 近松門左衛門「関八州繫馬」竹本座上演 十一月月上旬、辞世文を書く 十一月二十二日没、広濟寺・法妙寺に葬る

広濟寺寺宝等一覽

大覚大僧正作日蓮聖人像 当山には三体しかない言われる高僧大覚大僧正作の日蓮大聖人木像が伝承されていると伝わるが、その存否は不明である。

近松門左衛門木像 美濃村松雲作 大近松祭（十一月下旬頃）の法要に本堂御法前に飾られる。

浄瑠璃床本 「心中宵庚申」 幕府の心中物出版上演禁止令により「心中」の二文字が削り取られている。

廣濟寺草創古図 広濟寺草創当時の図。広濟寺、妙見宮、旧久々知村と旧上坂部村の位置関係が分かる。

近松座敷模型 高座敷とも呼ばれ、広濟寺の旧本堂裏に設けられていた。八畳二間、四畳半一間で晩年の近松が名作を書いた。

近松座敷段梯子 近松座敷の奥座敷は一段高く出来ており、そこに登るための梯子。

過去帳（近松当時） 上中下 三冊

廣濟寺開山講中列名掛額 広濟寺の開山に尽力した檀信徒の氏名が記された物。近松は右側二段目の二番目にある。

廣濟寺開山講中列名巻物 享保元年九月 開山日昌上

人の縁起文を掲げ、開山に尽力した檀信徒の氏名が記された物。署名の下に捺印がある。勿論、近松門左衛門や彼の作品出版を請け負った正本屋九右衛門の氏名がある。

廣濟寺開山講中列名巻物 享保二年九月 捺印なし。

二位大納言実藤（さねふじ）卿筆 法華和歌集 二巻 承元年間（一一一〇頃）に慈鎮和尚（慈圓）の詠んだ法華經二十八品和歌を、元禄六年（一六九三）に阿野実藤卿が書いた物。巻末に近松直筆の添え書きがある。近松が母の菩提を弔うため奉納した物。

妙見堂みくじ札と版木 上段の漢文を開山日昌上人の筆、下段の和文を近松の筆になる合作。

近松門左衛門筆養生訓

初代歌川豊国筆 娘道成寺絵馬 広濟寺には近松の由緒の故に沢山の浄瑠璃歌舞伎関係者が参詣してきた。これは、初代中村歌右衛門が奉納した物。

後西天皇勅筆御色紙 三葉 近松門左衛門奉納

正本屋九右衛門 近松門左衛門の作品出版を請け負った正本屋九右衛門の座像。広濟寺復興開山に尽力された廣濟寺本願人。

その他

桜町天皇勅許宣旨

日蓮聖人の真筆御消息一幅

日蓮聖人の真筆曼荼羅

伝教大師秀句抄一幅

曼荼羅本尊

日像聖人

身延山二十一世

身延山二十二世

本満寺三十二世

開山日昌上人

親鸞上人真筆六字名号

親鸞家系図
阿弥陀如来金像

広濟寺寺宝の多くは明治時代に不法に売却されたと伝わる。未だ文書を確認していないので真偽は不明ながら、当時の檀信徒が田畑を売り、八年に及ぶ裁判を行って取り戻したのが現在の宝物であるようである。寺宝数点はアメリカに渡る等、返還不可能となってしまった。
(伝)

阿弥陀如来金像や親鸞上人関係の宝物として記載したが、法華(日蓮宗)の当山にとってはふさわしくない宝物である。しかし、過去の資料に記載があるので掲載した。右記浄土宗系の宝物は、境内に安置していない事を付記する。

広濟寺歴代住職

第一世	如意珠院日昌上人	元文三年十月六日示寂	(一七三八年)	七十二才	
准二世	幽玄院日底上人	元禄七年五月十九日示寂	(一六九四年)		大阪寶泉寺五世、南都(奈良)常德寺中興開山
准三世	妙栄院日壽上人	宝永五年五月二十八日示寂	(一七〇八年)		
第四世	栄昌院日運上人	元文五年六月二十七日示寂	(一七四〇年)		開山日昌上人直弟奈良常德寺より
第五世	弘法院日實上人	寛保三年八月示寂	(一七四三年)		開山日昌上人有縁奈良常德寺より
第六世	本壽院日領上人	宝暦七年三月二十四日示寂	(一七五七年)		七十五才 在十六年
第七世	遠妙院日侃上人	明和二年七月十三日示寂	(一七六五年)		侃 [〃] かん 開山日昌上人有縁奈良常德寺より
准八世	隨光院日照上人	宝暦十一年六月示寂	(一七六一一年)		生国佐渡安佛房妙宣寺
准九世	本領院日榮上人	安永二年四月二十二日示寂	(一七七三年)		親王家 肥後国本山本妙寺歴代
第十世	靈智院日道上人	寛政十一年四月十日示寂	(一七九九年)		在九年 備後三原妙正寺より
第十一世	鏡明院日性上人	文化十三年七月二十九日示寂	(一八一六年)		繪馬堂・新座敷建立
第十二世	信哉院日苗上人	文化八年四月二十五日示寂	(一八一一年)		大阪谷町本長寺より
第十三世	鏡照院日進上人	天保九年四月三十日示寂	(一八三八年)		古借五十貫返済、居間再建・修復
第十四世	皆如院日是人	弘化三年八月四日示寂	(一八四六年)		四十才、在十一年
第十五世	眞乗院日燈上人	明治二十四年十一月二十二日示寂	(一八九一年)		十四世日是人直弟
第十六世	圓乗院日篤上人	明治四十三年四月十八日示寂	(一九一〇年)		氏名太田慧樹・初の大学卒の住職
第十七世	眞妙院日榮上人	寺宝多数を売り、広濟寺を個人名義としたため後に裁判となる。			
第十八世	觀月院日輝上人	大正十四年四月七日示寂	(一九二五年)		姓矢野 香川県三豊郡出身
第十九世	大持院日顕上人	昭和七年二月二十一日示寂	(一九三二年)		在八年
第二十世	行孝院日龍上人	昭和三十三年六月二十六日示寂	(一九五八年)		七十才 在二十六年
第二十一世	泰壽院日瞳上人	現住職 氏名水川行孝 最上稻荷より			
		現住職 氏名石伏龍齋 本堂・庫裏再建立			

准二世、准三世、准八世、准九世は実際の住職ではなく、歴代に加えられたもの。

参考文献

日本歴史シリーズ 第十二～十四巻
鑑賞 日本古典文学 第二十九巻
近松をめぐる 浄瑠璃歌舞伎の關係に就いて
同志社国文学 第三十号
近松門左衛門と鯖江
近松門左衛門の研究
近松世話物集
近松門左衛門と尼崎廣濟寺（昭和十一年発行）
武庫の探勝（昭和十四年発行）
阪急沿線 歴史紀行
日蓮宗事典
広濟寺過去帳
大法輪平成元年三月号（妙見菩薩・鬼子母神）
平凡社世界大百科事典（一九七三年版）
日蓮宗寺院大鑑

大久保忠国
湯川春洋
向井芳樹（同志社大学）
原 道生（明治大学）
守隨 憲治
多田 莎平
山本 六郎
熊野紀一
日蓮宗事典刊行委員会

世界文化社
角川書店
中央公論事業出版
同志社大学
鯖江市教育委員会
鯖江市教育委員会
旺文社文庫
大近松宣揚会
阪國バス名所史跡探勝会
阪急電鉄
日蓮宗宗務院
大法輪閣
平凡社
日蓮宗大本山 池上 本門寺

平成二年四月五月初版発行（非売品）
平成十三年一月十日第四版改訂
著者（副在任職） 叡齋 いしづき えいさい
印刷 広濟寺
千六六〇九七七
兵庫県尼崎市久々知一丁目三～二十七
ファックス 〇六～六四九一～〇八一五
〇六～六四九一～〇〇四六
<http://www.kosaiji.org/> post@kosaiji.org